

オン/オフグリッドの家庭生活から エネルギー概念を再考する

Re-internalization of Energy:
Reflections on Off-Grid Domestic Life

北川 真紀
KITAGAWA, Maki

はじめに

本稿は、我々の生を支える各種のエネルギー、その中でも特に「電気」を主題として扱うものである。家庭生活だけではなく、研究や教育、労働においても我々の生活になくはならない存在となった電気は、2015年には *Cultural Anthropology* 誌で「電気をめぐる人類学」の特集が組まれるなど、人類学の主題としても注目を集めてきた。これまでの先行研究は、政治的権力や人々の抵抗、そして電気システムの導入による文化への衝撃などに焦点がある。2015年の特集の序論を担当したドミニク・ボイヤーが「電気と燃料というふたつの分析を通して、政治的権力を再考する」[Boyer 2014:325]と主張するように、その力が比較の見えやすいインフラストラクチャーの政治性が注目され、エネルギーと力の結びつきは繰り返し主張されてきた。しかしながら、それらの先行研究の射程は「電化」という現象に限られている。電化の状況にのみ焦点をあわせると、その結果は政治権力など外的なものに帰結することになる。インフラストラクチャーの人類学それ自体が行き詰まりを告発してきたように[木村 2018]、エネルギーの獲得に関する人々の実践は主に政府、自治体や資本主義社会への抵抗として、二項対立で描かれてしまう。加えて、エネルギーを必要とする家庭生活は人々の身体的参与とともにあるにもかかわらず、家という枠組みの内外で分断して思考する傾向をつくり出してきた。

そもそも我々の生活において電気はなにを為しているのだろうか。また、人間は電気というエネルギーをいかに経験しているのだろうか。本稿では、この経験の諸相を捉えるために、まず、エネルギーの人類学の射程をより広くとる必要性を主張する。我々が生を維持するために動力とするエネルギーは、もちろん「権力」である場合もあるが、太陽の光や熱、水、風などの自然現象、さらに我々の身体が繰り出す運動とも無縁ではないものである。エネルギーは作用(=力)であり、身体はその作用を受け止める。また反対に、身体が他者やものに対して作用することもあり、人々が電気エネルギーを用いてなにか特定の目的を達成したり、運動を行ったりするという単純な

1 オフグリッドは、オプションがない状況下での「未電化」をも示す言葉であるが、本稿では何らかの積極的な選択の上での「非電化」を対象としており、以下でもオフグリッドは「非電化」の意を示すものとする。また、電気やガス等のエネルギーインフラからの断絶を自ら選択することに限らず、都市生活からの脱却や大自然の中での暮らしといった住まう場所の選択が最初にあった場合でも、積極的にエネルギーの自給に取り組む場合はすべて含める。

行為も、こうしたエネルギー (power) のやり取りであると考えることができる。このように、本来エネルギーは様々なモノ、人に内在している。

上記の観点から、電気をめぐる人類学に対して新しく3つの視座「力のやりくり」と「生の技術」、そして「エネルギーの再内在化」を導入したい。まずは、エネルギーが本来「力」であるということに注目し、経済人類学者スティーヴン・グードマンによる循環するエネルギーとオイコス(節約)の関係性についての考察[Gudeman 2012]から「やりくり」の諸相に目をむける。また、ある環境において自らの生を可能にする技術を「生の技術」と呼び考察の視座とする。ティム・インゴルドによる環境観と、生態学的理論を土台として展開されてきた熊谷晋一郎らの論考から、身体と環境は不断に切断と接続を繰り返しており、その都度、タスクを行うために必要なエコロジーを立て直している点を見出すことができる。これらは客体化されてきたエネルギーを、身体の活動や感覚経験を道筋に再内在化して考察するという本稿の試みに繋がるものである。

人間のエネルギーにまつわる幅広い活動を考えていくにあたり、本稿が調査・考察の対象とするのは「非-電化」の実践である。非-電化とは、電化の「否定」ではなく、電化とは別の方法で(太陽光パネルやディーゼルエンジンなどを利用して)電気の生産と消費を行う実践、または電気を動力として行ってきたことを見直し、別の手段に代替させるような実践のことを差す。欧米ではいわゆる「オフグリッド」¹という言葉で指し示されてきた。近年新しいライフスタイルとして選択されうものとなったオフグリッド実践の様子を詳細に捉えた研究には、カナダの社会学者フィリップ・ヴァニーニらの『オフグリッド：家庭生活を再編する』(*Off the Grid: Reassembling Domestic Life*) (2015) という民族誌がある。カナダ政府の定義によるとオフグリッドとは「電気やガスの供給網(グリッド)を絶った家」であり、オフグリッドの建築に住む人々は、自ら電気を発電して、消費するというサイクルをつくらなければならない[Vannini and Taggart 2015]。その方法には太陽光パネルを用いた発電が最も多く、その次に水力、風力が続く。しかし、ただ発電方法を変えればよいだけではなく、有限なエネルギーをやりくりするために家の建築の方法や日々の行為を変える必要がある。カナダの全13州で調査を行ったヴァニーニらの民族誌では、「オフグリッド」がいかに家庭生活を再編するのか、その諸相が描写される。本稿では、上記の先行研究が開いたテーマを引き継ぎ、人類学の問題として再考していくために、筆者自身による栃木県那須町「非電化工房」の民族誌的調査を主な考察の対象として、オンからオフへの移行、そのプロセス自体を徹視的に検討する。「非電化工房」とは、発明

家の藤村靖之氏が日夜電気を使用しない製品を発明・制作するアトリエであり、さらには藤村氏が妻の百合子氏、そして数人の「弟子」とともに暮らしを営む家庭である²。

オフグリッド実践は、パーマカルチャーの概念を軸としたエコビレッジの活動 [Veteto and Lockyer 2008] や、60年代後半にアメリカから世界中へと広がったヒッピームーブメントのような、理想的な思想を実現するための活動であると捉えられる傾向にある。2011年に東日本大震災を経験した現代日本を対象とするならば特に、オフグリッド実践は容易に「反原発」や「反政府」といった政治への対抗・批判という側面が強調されることになるだろう。しかしながら、政治権力への偏重をその帰結としてきた「電化」の枠組みを取り除き、より広い視野で「エネルギー」の人類学を構想していくならば、実際にその実践の根本を支え、じつに多くの時間を要することになるのは、身体的参与を必須とする家庭生活の維持である。それゆえ、いかに周囲のモノや人々との関係を編み、ほどこき、そして編み直していくのかという微細な観察と考察を通して、はじめてオフグリッドの——そしてそれと表裏一体であるオングリッドの——生を読み解くことができると考える。

エネルギーの再内在化へ

人類学は、これまで電気、そしてエネルギーをいかに議論してきたのだろうか。第1節では、エネルギーをめぐる人類学の系譜を辿り、展開されてきた人類学的研究の問題系を整理するとともに、「エネルギーの再内在化」に向けて理論的考察を行う。

1.1 エネルギーをめぐる人類学的研究

ポイヤーによれば、電気をめぐる人類学は現在に至るまでその系譜を3期に分けることができる [Boyer 2014]。第1期は、文化進化論を唱えたレスリー・ホワイトの研究に代表される。ホワイトはエネルギーを人間の生と歴史を理解するための重要な概念であるとしていた [White 1943]。太陽に生命の原動力を見出し、エネルギーの熱力学法則に注目して展開される主張³は電気概念を拡張する力強さを持っていたと言えるが、ホワイトの見解は物質文化論が主流になるにつれ影を潜めていく。第2期は、1960年代に入り、先進国のエネルギーの使用形態に批判的な人類学者たちの試みに代表される [Boyer 2014]。彼らは、発電施設を増築することや燃料を確保

2 筆者は2017年4月から「非電化工房」にて断続的に調査を行った。工房の活動の目的は「エネルギーとお金に依存しないでも得られる豊かさの選択肢の提供」。非電化の家庭生活に関する実験を行い、それをライフスタイルとして提案する「テーマパーク」でもあり、技術的な相談なども含めて世界中から年間に2000人ほどが訪れる。藤村氏の代表的な発明品には、「非電化冷蔵庫」や珈琲の生豆を焙煎する「非電化焙煎器」などがある。

3 「すべての生きとし生けるものは、太陽から直接／間接的に伝わるエネルギーによって動くエンジンである」とみなすことができるだろう [White 1943:335] と言及している。

4 スターらによれば、インフラの特徴は①埋め込み、②透明性、③距離や範囲の越境、④メンバーシップの一部としての学習、⑤実践の慣習との関連、⑥既存の標準の体現、⑦既存の土台の上に構築、⑧破綻による可視化という8つである[Star and Ruhleder 1996]。

5 彼女の調査地である南アフリカでは、電気、水道料金の支払いボイコットへの対策として1980年代にプリペイド式メーターが導入されたが、破壊され、電線から直接エネルギーを得るなどして無効化されるなどの行為が目立った。フォン・シュニッツラーが注目するのは、人々が物質を破壊することで技術の隠れた政治性を暴露させる側面である。頻繁にみられた破壊行為に対して政府はメーターの設計をより強固に変えるなど対策も講じており、こうした破壊と強化のループは人々の生に対するインフラの影響力を拡大し、権力への依存度を高める結果を招いている。

6 権力性は環境の問題とも無縁ではない。1970年代には「途上国」の地域研究者や先住民族を研究対象とする人類学者らは、発電施設の建設や化石燃料の発掘など、新たな開発によって人々の土地が奪われ、資源へのアクセスが制限され、伝統的な生活基盤が破壊される惨状を告発している[Boyer 2014]。この潮流はアメリカ合衆国をはじめとして起こりつつあった環境思想、環境運動の高まりと時を同じくする。1979年のスリーマイル島原子力発電所の事故を起因とする、原子力等高度なテクノロジーに対する懸念、ラブキャナル事件などの化学物質汚染への不安、大量消費社会の発展と資源の枯渇に対する懸念などを契機として高まりをみせた環境思想、環境保全運動は、問題の起源をたどれば原子力をはじめとする発電のための科学技術へとたどりつく[福永2010]。

することなどをめぐり、先住民族のコミュニティの権利や環境問題、資源の搾取などに関する議論を活発に行ってきた。そして、第3期の電気をめぐる人類学は、例えば電気のトレーダーやアナリスト、エンジニアへの調査を通して電気に対する経済的思考を明らかにする等、様々な行為者の視点から急激に電化が進む社会で暮らしや経験が大きく変容する様子を詳細に報告している[Winther 2008, Wilhite 2008, Özden-Schilling 2015]。

民族誌的記述の積み重ねは、電気が単なる動力であるだけでなく、人々の消費生活全般を変容させるものであるとの認識を生んだ。本稿の出発点は電気まつわる研究群であるが、電気をめぐる人類学はより包括的にエネルギーの人類学でもあり、そこにはガスや石油などの燃料をめぐる試論も含まれる[Michell 2011 ほか]。以下では、「エネルギーの人類学」の問題系を権力と感覚の2つに整理して説明する。

第一に、エネルギーに関連する権力性については、1990年代から盛んに議論され続けているインフラストラクチャーの人類学から多く報告されている。人類学者のソーザン・リー・スターは、インフラの特徴の一部として、普段は意識されず不可視であることと故障や断絶による可視化を指摘したが⁴[Star and Ruhleder 1996]、場所と経験のスケールを再編するインフラは、その存在を感覚しなくなればなるほど我々の生に浸透する。意図的に供給をコントロールされ、設備の不具合で何度も停電を経験する場合には、物理的に重く、コストがかかり、永続的であるインフラは、逐一権力の存在を想起させるものとなる[Winther and Wilhite 2015]。アンティナ・フォン・シュニッツラーは、南アフリカでのプリペイド式メーターをめぐる「交渉」の観察⁵を通して、インフラはシンボルや象徴ではなく、それ自体が政治的な場であることを指摘した[Von Schnitzler 2013]。電気の供給に関して国家による介入があったとしても、財力がなければ使用することはできず、生は巨大な権力の手の内にある。北インドの村で調査を行う人類学者アキル・グプタも「電気の配線が通っており電化されていることと、実際に電気にアクセスできるということは別の問題である」として、電化されていることの矛盾を主張している[Gupta 2015]。これまでの民族誌的蓄積は、権力に対する多様な抵抗の実践を明らかにしている。中には、日常的経験によって形成される倫理に注目するものもある[Smith and High 2017]。しかしそうした主張も含め、エネルギーの人類学はその「力」が比較の見えやすいインフラの政治性を強調することで、エネルギーと権力の結びつきを繰り返し主張してきた⁶。

加えて、近年になって電化は身体、感覚の問題としても認識されている。タンザニアのザンジバルにて調査を行ったタニア・ウィン

ザーは、照明が昼と夜の区別を曖昧にして場所の意味を変化させたこと、テレビが居住者にとっての時間性を変化させたことを報告している [Winther 2008]。ウィンザーの民族誌が詳細に伝えるのは、モノやエネルギーの供給は人々の日常生活を極端に変化させるということであり、それに伴い社会構成や文化も変容するという事実であった。しかし、これに対してハロルド・ウィルハイトとグレゴワール・ヴァレンボルンは、具体的に変化するのは、モノやエネルギーと関係を結ぶ「身体」であるという。資源に限りがあるにも関わらず、年々急速に増え続けるエネルギーの消費行為を説明するために、彼らは「身体の可塑性」という視座を導入し「エスカレートするエネルギーの消費は身体の変容として解釈することができる」ことを主張した [Wallenborn and Wilhite 2014:56]。彼らによれば、近代の身体は新しくこれまでとは別の心地良さの感覚を獲得しているのであり、エネルギーの問題は身体から再考されるべきである⁷。

また、マイク・アヌサスとティム・インゴルドは、「スイッチ」がモノとの関係性を断絶させることを主張して、インフラを非難する。アヌサスらはインフラの特徴として、隔離 remoteness、伝導 conduction、絶縁 insulation、感覚的希薄性 sensorial subtlety という4点を指摘した [Anusas and Ingold 2015]。ボタンひとつで操作することができる電気エネルギーは、どこからくるのかも定かではない他者的な存在として消費されてしまう。送電網が完備されている場所で消費者が知覚する世界は、表面的で閉鎖的になりうるという。彼らの主張は、感覚されることなくすばやく(モノや人が)消費されていく状況への忠告ともとれる。

上記で参照してきた研究においては、スイッチひとつで電気がつくという状況の「無感覚性(感覚の希薄化)」が問題視され、エネルギー問題を家庭や個人での消費のパターンなどと結び付けて考える必要性が主張されている。これらは、エネルギーの人類学の焦点を「身体」に移行する点で非常に興味深い。しかしながら、その射程は「電化」という現象に限られており、電化のみを現在、そして今後の世界のエネルギー利用における全体として把握してしまっている点にある。電化の状況のみを対象とすると、「身体」や「感覚」を経由していたとしても、結果的にその焦点は自治体や電力会社、政治権力、消費社会など外的なものに帰結することになるが、人々のエネルギーをめぐる実践は、決してそうした大規模なテクノロジーに集約されるものだけではない⁸。以下では、そうした「エネルギー」に対する認識を再考し、考察の射程をより広くとるべきとする本稿のポジションについて示していく。

7 ウィルハイトらは、モースやブルデューらの理論を参照しつつ「身体は、世界についての独特だが明らかな知性の形態の宝庫であり、身体の知性は消費の仕方に影響を与える」[Wallenborn and Wilhite 2014]ことを指摘している。

8 ボイヤーも、電気そのものから理論的なイメージをインスピレーションとして得ることや電気を生命の活動そのものと接続させて考えていくことには言及するのだが、それが具体的な「生」の経験として存在しているということは範疇外である [Boyer 2014, 2015]。

9 重要なのは、ここでいう再内在化は身体の内部と外部を区切り、内に権力の届かない「安全地帯」を設けようとするものではない、ということである。再内在化に「再」という接頭辞があるように、むしろ内と外を行き来するプロセスを前提としており、先行研究では見過ごされてきたエネルギーへの参与の一形態を描くことを試みている。

1.2 エネルギー概念の再考：力・感受・家庭経済

まずは、日常的経験の様相を捉えるために、エネルギーの人類学の射程を広くとる必要性を主張したい。もちろん「権力」は様々な場面で恒常的に生に作用するが、我々が生を維持するために必要とするエネルギーは太陽の光や熱、水、風などの自然現象、さらに身体が繰り出す運動でもある。そのため、顕在化する政治権力は「力」のひとつの現れ方にすぎない。そもそも「力」はエネルギーの本来的な性質のひとつでもあり、人や動物、植物、そしてモノを動かすための動力である。そのように理解するならば、筋内匡が『イメージの人類学』であらゆるイメージを力であるとして論じ、力は身体に「感受」されると指摘するとおり〔筋内 2018〕、エネルギー（英語では「力」も「エネルギー」もともに power と訳すことができる）にある種の作用として捉え直すことができるだろう。

高いところから転げ落ちてきた石は、下方にある石に衝突して、そのイメージ＝力が下方の石を動かしたり割ったりする。お花畑に広がる花の香りは、香りのイメージを生み出すだけでなく、抵抗したい力———というならば権力性———とともに昆虫を引き寄せる。〔…〕いずれにせよ確かなのは、「イメージ」と「力」は連続的に繋がったものであり、多くの場合、両者は表裏一体だということである。もしこのような言い方が概念的に不明確であるなら、「イメージ＝力」を合わせた全体を、スピノザ哲学の用語を使って、「感受^{アフェクテイオ}」という一つの言葉で言い換えても良いかもしれない。〔筋内 2018:137〕

筋内はここで「感受」という言葉を、心情や気持ちという要素と結びつきやすい「感受性」という言葉とは異なり「身体が受け止めるものをまるごと含んでいる」〔筋内 2018:141〕と説明する。エネルギー（power）は作用であり、身体はその作用を受け止める（感受）。また反対に、身体が他者やモノに対して作用することもあり、人々が電気エネルギーを用いて特定の目的を達成したり、運動を行ったりするという単純な行為も、こうした力のやり取りであると考えることができる。このように本来身体やモノにも内在するエネルギーは、自然科学のエネルギー概念からは、外在のものとして客体化される。しかし、エネルギーの問題を根本から考え直すためには、エネルギーの「再内在化」⁹が必要であり、それが身体をもって受け止められ、力として活かされ、やりくりされるという事実から出発するべきであろう。

こうした試みにとって重要なイメージは、経済人類学の領域でラ

ディカルに展開されている。人類学者スティーヴン・グードマンは、パナマとコロンビアの農村で共有される「生命力 vital energy」について述べた論文で、循環するエネルギーとオイコス（節約）の関係性について興味深い考察を行った [Gudeman 2012]。パナマとコロンビアの農村において「生命力」とは、「強さ strength」「力 force」として認識され、涵養から組み合わせられるものであり、地方経済におけるすべての行為と家族から他人にいたるまでの関係性の構築とを結びつける「流れ current」であるとされる [Gudeman 2012]。しかし、「生命力」の源流には限りがあり、人々はうまくやりくりして使用しなければならない。興味深いのは、神から与えられるとする一定量の力が、大地から作物を生み、作物の力がそれを食べる人間（や動物）へとうつり、今度は人間が働く動力となり、また作物を栽培するというふうに循環することである。グードマンはその流れが見事に熱力学の第一法則に一致することも指摘しており¹⁰、「流れ」を身体の内部と外部を区別することなく行き来するエネルギー energy であると述べる。このようにすべての行為を力の循環であるとするならば、人間は、動物や作物とのエコロジーの中に、その一部として位置づけられることになる¹¹。

また、彼は、フィールド調査でパナマとコロンビアの農民らが経済活動の基盤は家であると主張する場面に何度も立ち会い、家庭経済は「節約」であるという結論に達した [Gudeman 2012]。グードマンが出会ったのは、市場経済の原理の上で貨幣のコストによってのみ計られる「節約」ではなく¹²、物質の使用に関連する「強さの流れや富の本質に関する概念」 [Gudeman 2012:68] であった。先ほど筆者は「エコロジー」という言葉を使用したか、 「エコ」の語源に遡るならば、それは「オイコノミア」に行き当たる。オイコノミアとは、古代ギリシャ語で「家政」を意味するオイコス oikos と「マネジメント」や「分配」を意味するネメイン nemein を組み合わせた用語であり「家政のマネジメント」と訳することができる [Leshem 2016]。エネルギーを感覚経験から「力」の再内在化として再考する試みは「どのように家庭を維持していくのか」という日常経験に結びついていく。

1.3 生の技術：環境と身体感覚を結ぶ

エネルギーを再内在化することは、その問題を「エコロジー」として思考することを可能にする。これは、広義のエネルギーの人類学にとって決定的に重要な前提である。なぜならば、ある環境においてエネルギーを利用しながら自らの生を可能にしていく過程では、身体と環境は不断に切断と接続を繰り返しており、その都度全体の

10 グードマンは以下のように記している。「強さの概念は、エネルギーの保存とエントロピー、つまり熱力学における第一、第二法則と比較できるだろう。第一法則によると、エネルギーはプロセスにおいて作り出されることもなく、また失われることもない。むしろ、それは保存される。第二のエントロピーの法則によれば、エネルギーの形式、もしくはその使用のための潜在能力は変化する。いくつかの点において、これは、これらの地域の人々が、強さを構成しそれから消費したり使い切ったりすると話すときに意味することである」 [Gudeman 2012:61]。

11 パナマ、コロンビアから遠く離れたドイツでも、人間と自然を同時に説明する概念としてエネルギーが使用されている事例がある。藤原辰史は、1926年に出版された経済学者エルナ・マイヤーによる『新しい家事——経済的な家庭運営の指南書』を分析した論考で、20年代のドイツにおいて家事が経済的な節約の方法というよりはむしろ家庭内のエネルギーを管理すべきであると主張されていたと言う [藤原 2014]。藤原によれば、「燃料と同じ目線で人間の労働力が観察されている」 [藤原 2014:132]。

12 いわゆる電気エネルギーに関する政策で一般的に言及される節電や節約、つまり暑さ寒さを我慢して電気代を節約することも、省エネで効率的な家電に買い替えて安心することでもないということである。

13 ギブソンは、人間の視覚に関する探求によって「環境とは何か」を明らかにしていく中で、外の世界にあるはずの環境に自己の知覚が深くかかわっており、我々の身体が環境と切り離してはあり得ないということを主張した〔ギブソン 1985〕。鳥の目から見た世界ではなく、居住者の視点から出発して世界像を描いた点でギブソンの理論は重要である。

はたらき(=エコロジー)を立て直すと考えられるからである。以下では、インゴルドの「形成-過程の-世界(world-in-formation)」に関する理論と、生態学的な理論を土台として展開される熊谷晋一郎の論考から、そのような接続と切断の連続を「生の技術」として見ていく。

環境という言葉は、人類学において長らく明示的なものとして扱われてきたように思われる。しかしながら、環境をどのようなものとして想定するかは、「生」そのものの理解の仕方を左右する。インゴルドは、心理学者ジェームズ・ギブソンの「生物が環境における特定の角(ニッチ)へ適合を行う」という主張¹³を、環境の自立性を強調しすぎているとして批判した〔インゴルド 2017〕。ギブソンは、独自の概念である「アフォーダンス」も「環境が動物に提供する(offers)もの、良いものであれ悪いものであれ、用意したり備えたりする(provide or furnish)もの」〔ギブソン 1985:137〕と定義しているが、インゴルドによれば、ギブソンが想定しているのは、舞台セットのように「備えつけられている(furnished)」〔インゴルド 2017:178〕環境である。一方で、インゴルドが徹底して主張するのは、固定化された環境への理解ではなく、運動態としての生の理解から導き出される「形成-過程の-世界」である。「人々の居住する開かれた世界は、彼らのためにあらかじめ準備されているわけではない。それは徐々に人々の周囲で形を取るようになる。開かれた世界とは、形成と変容の過程の世界である」〔インゴルド 2017:179〕。ここでインゴルドが力説するのは、環境が刻一刻と移り変わるプロセスにあるということだ。では、具体的に、身体の知覚と作用はそのような環境に対して、いかに展開するのだろうか。

この問題を考える手がかりとして小児科学や当事者研究を専門とする科学者・熊谷晋一郎による『リハビリの夜』(2009)を参考にしたい。『リハビリの夜』は、先天的な脳性まひを患う熊谷自身の身体がものを含めた周囲の環境といかに「つながる」のかを当事者研究の立場から分析的に論じた著作だ。ギブソンやベルンシュタインの生態心理学における理論をベースとしてオリジナルに立ち上げられる身体論は、自身の身体の「特殊性」を超えてリズムカルな流れ、プロセスとしての生の理解を主張している。熊谷は、大学入学を期にはじめた一人暮らしのエピソードを紹介しつつ、これまで文字通り自身の手足となり動いてくれた両親との別居は、トイレに行くというタスクひとつを取っても、新たな身体イメージの獲得を迫るものであったことを述べる。介助もなく、さらにはリハビリに取り組んでいた頃のような模倣すべき身体もないという状況で頼りにできるのは、幾度とない挑戦と失敗から得られた情報である。業者の手も借りながら、自身の動きを助けるための手すりや土台を設置

するなど環境を自分自身に適合させることで次第にものとのつながりを獲得していった熊谷は、両親だけでなく、不特定多数の介助者に触れられるという経験を通して他者との関係性も同じく変容させていく。一度得た関係性はすぐにでもまた「ほどける」可能性をもつが、熊谷にとって、モノ、人という区別にかかわらず「新たなつながり」を築き上げるそのプロセスは「ほどけと結び直しの反復」[熊谷 2009：205]である。

また、「新たなつながり」を得る過程で身体のあり方を決めるために観察した環境の発見は、同時に自身の身体についての発見でもあったという点が興味深い。熊谷の経験では、健常者の正しい動きを身体化するのではなく、自己の身体からつながりを模索して、結果的に生きられる状態にするということが達成されてきた。環境は、切断と接続の反復過程を経て自己の変容とともに再編されるのであり、さらに環境の変容によって自己も再編されている。

このように、生態学的アプローチからは、我々の身体がいかに変容と形成過程の世界を連続的に、そして直接的に経験しているのかという点が確認される。筋内やグードマンの導きによって拡張させてきたエネルギー概念を思い出すならば、上記で明らかになった生のプロセスを、身体とその周囲に物理的に存在する事物や人々との関係にとどまらず、よりダイナミックなエコロジーの中で捉え直していくことができる。「エネルギーの再内在化」は、新たなつながり方を模索する身体が、「外」にエネルギーが多様にありうることを認めつつも、自覚的に再編していく実践にある。道具やテクノロジーを活かしながら、身体の力を天候等コントロールできない自然の力と組み合わせ、やりくりすること。その上で、全体としてのエネルギーの収支を合わせていくこと。本稿の最終的な目的は、そのような直接的な経験を越えた身体と環境のやりとりを考察することにある。次章以降では、オフグリッド実践に関する民族誌を参照し、より具体的なイメージをもって描写する。

2 民族誌的描写

本稿での考察の対象は筆者自身が2017年の4月から断続的に行った栃木県那須町「非電化工房」での民族誌的調査であるが、まずは「オフグリッド」の家庭に共通する要素をヴァニーニとタガートによる先駆的な民族誌を中心に考えてみたい。その上で、より徹視的な観察を通して切断と接続を経験する身体を描写する。

14 アメリカの建築家マイク・レイノルズがパッシブソーラーの利点を最大限活かして、コストがかからず、さらに手に入りやすい素材で作れるようにと提唱した「アースシップ」をモデルとする家である。



写真1: 廃材のタイヤと泥を利用して壁をつくる(《オフグリッドの生——切断をめぐって》(0:34:30))



写真2: 屋内の菜園(写真提供 Phillip Vannini氏)

2.1 オフグリッドとはなにか： 環境に開けた家とタスク・シーケンス

カナダ全土で約100件のオフグリッドの家庭を訪ねたヴァニーニとタガートによる調査は2年の歳月をかけて13州すべての地域で行われた。オフグリッドへの移行は思想的な理由によるものがあるが、移住に伴い必要性に迫られたパターンが大多数を占めるといえる[Vannini and Taggart 2015]。カナダは国土が広いので、人口密度が低い地域においては電気の供給網が整備されていない。そうした地域で電力会社からの供給を望む場合には、電柱を建て、電線を引く必要があるが、電力会社への法外な支払いを避けるためにエネルギーを自給することを選択する人々も多い。電気やガスの供給網が絶たれた建物では、自ら電気を発電して、消費するというサイクルをつくらなければならない。その方法には、太陽光パネルなどのテクノロジーを使用して発電を行う「アクティブソーラーシステム」に加えて、太陽の光と熱を直接室内に取り込み有効利用できるように工夫する「パッシブソーラーシステム」がある。

ケベック州に暮らす夫婦・ヘレンとアラインは、廃材のタイヤと泥を素材として、自らの手で家づくり¹⁴を行っている[Vannini and Taggart 2015:127-130]。泥と砂を混ぜたものをタイヤに詰め込み、階段状に重ねた後、漆喰で固めて厚い壁を作る。そうすれば外気がマイナスになる冬期でも、室内ではレモンの樹が育つほどに暖かいという。また、土は外気に影響されることなく1年中年間の平均気温を保つといわれるが、家を丘によりかかるようにして配置し、文字通り丘と「ともに」建つことで、家の保温性が高まり申し分ない快適さを獲得することができる。オフグリッドの家は、プレーンな土地があり、その上に設計された箱が占拠するのではなく、その土地で手に入る素材やモノと対話しつつ作り上げられる。土地に「開かれた」家が特徴的である。

また、オフグリッド実践では、エネルギーの生産を考えるだけでなく畑で野菜を育てるなど食も自給する傾向にあり、さらに水の獲得や排泄の処理などにも次第に意識が向けられていく。ヴァニーニらの主張によれば、オフグリッドとは「家庭生活の再編」である[Vannini and Taggart 2015]。彼らが民族誌の一部として公開した映像作品《オフグリッドの生——切断をめぐって》(2016/86分)からは、そうした再編の様子が多彩で具体的なイメージを伴って理解される。映像開始46分後からの18分間の場面は水の確保、洗濯、排泄、土づくり、畑仕事、食材の保存、料理、食事…などタスクごとと構成されているのだが、以下ではその方法を「タスク・シーケンス」と呼び、説明したい。

この一連のまとまりの特徴は、まず、コンポストを使用して排泄物を土に変える実践についての語りのあとには、畑を耕し作物に水をやるシークエンスが続く、というように、タスクの構成に関連し合う仕事の連なりが意識されていることにある。このような編集の仕方¹⁵からは、まず、オフグリッドの方法や使用するモノは様々であるが、生活者が直面する課題は似ているということが分かる。また、タスク・シークエンスでは、登場人物らが食事や排泄、寒さをしのぐことや照明に関して、モノと関係しながら生活を維持する工夫を言葉を尽くして説明していることも特徴的だ。エネルギーの導線を辿っていくうちに、オフグリッドの生活ではオングリッドの人々と同じ用途のものは使うが、種類の選び方や、モノ自体の使い方が違うということに気がつく¹⁶。例えば、ウェンディは洗濯機を所有するが、太陽光から最大限に電力を得ることができる晴天の日にし動かさない。また、デイブやマレー夫妻が「愛用している」と語る洗濯機は水や電力の消費量が少ない二層式である。

別地域での事例ではあるが、西ウェールズのエコビレッジを中心にオフグリッドの生活について調査をおこなったエレイン・フォードは、ある論稿の中でマーヴィンという女性が発電しすぎてしまう電力を浪費しないように全自動のホームベーカリーを購入したと、「帳尻を合わせようとする」様子を報告している [Forde 2017]。エネルギーの生産と消費は分け難く結びついている以上、オフグリッド実践においては自らの生活に必要なエネルギーの量はおのずと把握されるようになっていく。それと同時に、生活にとって最も「効率的」なのはどのような状態なのか、注意深く調整されているのだ。

上記のように、オフグリッド実践者たちの家庭では、開かれた世界 [インゴルド 2017] の力をやりくりするシステムを取り入れ (アクティブ/パッシブソーラーシステム)、各々の土地に自らの力をもって参与する。連なりの中で紡がれる生活は、いつどのように素材やモノ、気候と向き合うのか、その仕方を変化させていた。

2.2 栃木県那須町「非電化工房」の概要と発明品

栃木県那須町¹⁷にある非電化工房も太陽エネルギーを活かすシステムを中心に、有機農業や機械の修理、木工作业まで多くのタスクが同時並行で行われている。以下では非電化の発明品と師による弟子への指導を中心に、その特徴を描写していく。

工房は、自家発電という有限性の中で実現できる「楽しい暮らし」の選択肢を見せ、当たり前前に電気を使うということを見直す場を提供するため、非電化製品の開発・販売や工房の見学会の実施、井戸

15 ヴァニーニらは地域や家庭をひとまとまりとするのではなく、タスクごとに場面を区切り、その上で連続したシークエンスを制作している。

16 中には、食洗機、電子レンジ、洗濯機などを所有する家庭もあり、室内だけ見るならば彼らがオフグリッドであることに気がつくことさえ難しい。

17 那須町は、福島県にほど近い栃木県の最北端に位置しており、周囲を標高の高い山脈で覆われている。震災直後は、独特な地形と風の流れから放射性汚染のホットスポットに指定された。現在でも都心部からの移住者が多い土地だが、高度経済成長期には別荘も多く、富裕層にとっては休暇を過ごすための避暑地としての利用が多かった。

18 本人の許可を得て、実名で記載する。藤村氏は現在76歳であり、3000以上の特許をもつ日本のトップ発明家のひとりである。株式会社小松製作所の熱工学研究室長として働いた後、子どもの健康と安全に配慮した環境にやさしい製品づくりを行うために株式会社カンキョーを設立した。2000年に葉山にて非電化工房をスタートさせている。

19 さらに、弟子が建て、運営をするカフェや宿泊施設、温室や山羊小屋など多種多様な建物も点在している。

20 日本人女性が手に持って作業することが苦にならない重さ(240g)で設計されている。

21 記述にはないものの、ローストされる豆の香りで完成を判断し、飲める温度になったことを確認した後、味覚でその出来映えを味わうことを考えれば、複合感覚を喚起することが分かる。

掘りや家づくりのワークショップの開催なども行う。主催するのは発明家の藤村靖之氏¹⁸で、敷地内には工房に毎年入れ替わりで住み込み、畑仕事や大工仕事を手伝う「弟子」のための合宿所もある¹⁹。筆者は2017年4月から8月の4カ月間にわたりワークショップへの参加や、農作業や木工など日常的な行為への参与を中心として、断続的に調査を行った。

藤村氏の発明品には「ソーラーフードドライヤー」や「ソーラーオーブン」など太陽の光と熱を効果的に利用するものが多数含まれるが、東日本大震災のあとに問い合わせが殺到したという代表的な製品には、放射冷却と対流を組み合わせでデザインされた「非電化冷蔵庫」がある。また、非電化製品のなかで最も売れているという「珈琲焙煎器(商品名:煎り上手)」は、人々が全身で知覚しながらタスクを行うことが前提とされ、周囲の環境に注意を向けさせることも重要な目的としている点で興味深い。藤村氏は素人でも生豆をむらなく焙煎できるように何度も失敗を重ね、半年間の歳月をかけて焙煎器を設計した²⁰。全自動の焙煎器であれば、ボタンひとつで素早く完了することを売りにするところだが、「非電化珈琲焙煎器」を使用した場合には、豆を挽き、カップに珈琲を注ぐまでに約25分かかる。ホームページで公開されている使用方法には下記のようにある。

火にかけたら、手首のスナップをきかせて左右に振ります。軽く振るだけで大丈夫です。焙煎器の形状で生豆が回転します。生豆の色が黄味がかかり、表皮がむけてきます。青っぽい煙が始め、生豆が薄茶色になり、表皮が舞い上がります。3分ぐらいたつと、生豆の水分が飛び、軽くなります。豆のはじける音「パチパチ！」が4～5回続いたら火を消して余熱で仕上げます。(非電化工房ホームページ)

およそ5分間の焙煎行程を説明するにあたり、変化する生豆の色や煙の色という視覚的要素や豆の重さの感覚が重視される。また、ここには「はじける音」とあるが、煎りはじめた段階では「シャラシャラシャラ…」という音が、100度を超えて水蒸気が出てくる頃には「モゴモゴ」に変化し、今度は「カラカラ」と乾いた音になるため、耳をすませているだけで煎り具合がわかるのだという²¹[藤村・有村2012]。このように、日常生活での検証を経て非電化工房から生み出される発明品は、タスク従事者の身体的参与を誘い込むことを意図して設計されている。

2.3 「弟子」の指導における感覚の強調

このように感覚を活性化させることは工房の別の側面でも強調されている。それが顕著に現れるのが弟子たちへの藤村氏の指導である。以下では、師としての藤村氏と弟子たちのやりとりから、技を習得する身体について描写してみたい。

工房では、毎年20-30代の若者を4名ほど「弟子」として受け入れている。弟子は期間が1年と定められており、セルフビルドの家づくりから畑仕事まで非電化の生活に必要な仕事をなんでもこなしていく。非電化の生活では、エネルギーの生産と消費の流れをつくるために自分の暮らしに合わせてものを作ることが前提であるが、藤村氏が「技術はほとんど道具の使い方と言ってもいい」と言うように、道具との関係性を作っていくことが実践の大半を占める。藤村氏がこれまでノコギリも握ったことがない弟子に対してつくることを指導する際にも、とにかく感覚をつかむことが強調される。「感覚が大事だから手袋は取ってください」「押しているっていう力じゃなくて密着しているっていう感覚が大事です」。このように確かなものとして感覚が重視されるのはなぜだろうか。2016年度の弟子として技術を学んでいた30代女性のMさんは工房での月例報告会用に作成していた資料に、毎月、道具との関係についての記述を多く残していた。ここでも身体感覚が繰り返し意識されている。

5月:エンジン刈り払い機はまだ腕に力が入ってしまう。パワーショベルは…回数を重ねると少しずつ覚えてきた。

7、8月: コーヒーの炒り方から淹れ方までを教わり、五感を研ぎ澄ませて素材と対峙するところが奥深い世界だなと思った。

9月: SVO 発電所の建設が始まり、凶面を見たり、コンクリートを流したりと慣れない作業で頭がいっぱいだが、「そんなことできるのだろうか」が様々な失敗の中で対処方法も学びながら形が見えてきた。

10月: 先生が鋸引きして、カットした材の厚みが均一で驚いた。感覚を研ぎ澄ませると精度が上がる。今回、鋸引きもそうだが、金づちの使い方もまだまだだと痛感した。ピン釘を何本も途中で曲げてしまった。金づちの重さで打つ。フラットに。最後に振り下ろした時にだけ力を入れる。体で覚えていきたい。

11月: 足踏み脱穀機はコツが分かるまで少し時間がかかった。唐箕(とうみ)は簡単な作りながら、いい道具だなと思った。それぞれの道具の特性を生かすには自分の感覚と少しの体力が必要。

22 「ポータブル・バイオトイレ」とは、椅子型のひとり用のトイレで、椅子の内部に回転式の缶を格納する。缶の中には土を入れ、排泄する度に回転させることで土のなかの微生物が排泄物を分解する、という仕組みである[非電化工房住み込み弟子日記2017]。筆者が関わる前にすでに構造図(図1)から必要部品を書き出す作業や木材など必要なものを揃える作業は終了していた。また、この日のカッティングはノコギリ、テーブルソー、トリマーと3種類の工具で行った。

23 弟子とともに作業に取り組んだことで、筆者は機械でやれば「まっすぐ切れる」ということではないと実感した。

(非電化工房 2016年度月例報告会資料より。傍線部は筆者による)

完成品の精度を上げるために「感覚を研ぎ澄ませる」とは、力の入れ具合や音、切れ味や振動などの触覚的要素から木屑や切断面が焼けて出るけむりなどの視覚的要素、動く身体の内的な運動イメージも含めた全体を指していると考えていだろう。

実際の指導も細かく見てみよう。2017年8月4日、筆者は工房のアトリエにて弟子2人(Iさん、Yさん)と、新たに弟子入りを希望して3日間の体験に来たKさんとともに木工の作業を行った。取り組んだのは「ポータブル・バイオトイレ」づくりである²²。この日に取り組んだのは72.5cmの長さの木材に「ほぞ」をつけるためにコンベックス(メジャー)を使用して「墨付け」し、さらに付けた印に沿って隅を切り落とす作業である。墨付けを完了してノコギリ、テーブルソーでの切り落とし作業を経験した後、筆者は作業を中止し、撮影を行いながら観察した。

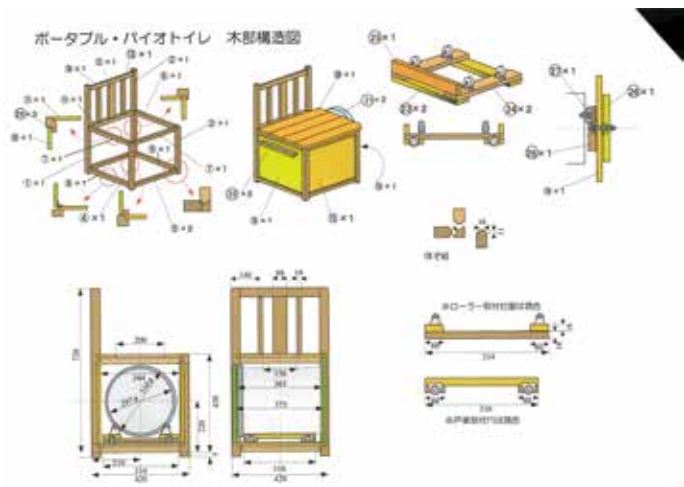


図1: ポータブル・バイオトイレ 木部構造図(藤村氏が作成)

木工を初めて行う弟子に対して、藤村氏は繰り返し感覚を強調する。「感覚が大事だから手袋は取ってください」、「自分の技量と機械と合わせてくださいね」。テーブルソーは自動で動くため機械に分類されるが、力の入れ具合やスピードなどによって出来映えが大きく左右されるため個人の「技」は必須である²³。そのため、藤村氏の言う感覚表現に注意深く聴き入る必要があった。

藤村氏はIさんの作業を見て、木製パーツの切断面の先端数センチ

チが最初に刃を入れた箇所よりも深くなっていることを指摘する。

F: Iさん、最後になにかおかしいことが起こっていますよ。こっちが入り口で最後が出口。出口でなにかよからぬことをしたってことですね。なにをしたと思う？

I: 力が抜けちゃったんだと思います。

F: ああ、もう終わったと思って集中力が欠けたんですね。

I: はい、そうです。

F: いつも最後が肝心だからね、危ないことはいつも最後に起こるから。だから最後まで集中力を切らさないでくださいね。(筆者に視線を向けて) 音楽のコンサートでね、素人の発表会ってあるじゃない。それで必ずあと最後の15小節くらいってとこで、みんな止まっちゃうの。おかしいくらい。なんでだと思えます？

Y: 気が抜ける…

F: 気が抜けて、しかも気が抜ける状況なんですよ。というのも、音楽だったら今弾いているけど、じつは先もはしている。時間軸をふたつくらい先に。リアルタイムの今の時間ともうちょっと先の時間。今これは「ド」で次は「レ」かなっていうふうに考えているわけにはいかないでしょう。そうして先をはしているんだけど、一番最後になるともう先がなくなっちゃうんですね。終着駅につくと時間軸が狂っちゃうんだよ。この練習を実はしておかなきゃいけない。それから、あ、もう失敗しないでうまくいったって集中力が切れちゃうんだけど、それを切らさないで最後まで。それを練習しておかなきゃ。

ここでは、トリマーを使用した木材の切断においては、並走する時間感覚があり、それがうまく統合されなければ行為の結果には綻びが出てしまうことが指摘されている。

藤村氏は初めての作業の時のみ立ち会いで指導を行うが、このような個人に対する感覚の強調に加えて、これがモノ、他者との共同作業であることも示しておきたい。作業者であるIさんは、機械を使い木工を少しずつ押し出して切断するには両手を使う必要があるが、切断面から細かい木屑が舞うためそのままでは視界の邪魔になり微細な調整ができなくなる。そのため、切断の作業を行わないYさんの協力が必要である。Yさんは掃除機を使い、切断の進行スピードに合わせて吸い込み口を移動させながら木屑を吸う(写真3)。実際、IさんとYさんは行為の違いから視野が別様に構成されている。しかし、木片を切断するIさんの様子を気にしながら、周囲のモノにも注意を払いつつ手を動かすYさんは、Iさんと同様に「木を切る」



写真3: アトリエでの木工作業の様子。左から掃除機で木くずを吸うYさん、指導する藤村氏、木を切断するIさん(許可を得て筆者が撮影)

ことを可能にしていた²⁴。

以上、非電化工房の特徴を示す発明品と「弟子入り」という学びの場での実践を素描してきた。次節では、先行研究の事例と合わせ、より詳細に考察する。

3. 考察

第2節では、オフグリッド実践者たちがエネルギーの生産と消費のサイクルに参加しながら家庭生活を立て、維持する姿勢と、実際にオフグリッドの生活に必要な技を身につけていくプロセスについて記述してきた。以下で考察を行う。

まず、オフグリッド実践において「住まう」ことは自然のエネルギーを利用する既存のシステムを取り入れながらも、各々の土地に合わせて編成していくことである。ヘレンがタイヤ、泥、砂という手に入りやすい素材で丘の一部として家をセルフビルドし、最大限のエネルギー効率を実現したように、野外へと開けて内と外の区別を曖昧にする建築様式が見られた。また、家を「(土地)全体のシステムの一部」として認識することで、自らを環境の中に位置づけ直し、エコロジーを生成させて(続けて)いると言える。そのプロセスにおいて熟考されるのは、エネルギーの「帳尻を合わせられるか」[ベニユス 2006:79]である。

各家庭や実践者によってオフグリッドの生活の仕方は実に多様である。課題が似ていたとしてもそれに対する取り組み方、解決策はその土地の特性や生活者の個性、また思い描く生活像や過去の経験などを含めて様々に組織される。それは、エネルギーを自給して暮らしを営むという共通点は存在するものの、畑の野菜をはじめとして「生きもの」を相手にしていることで、技術がその都度生成されるためだと考えられる。熊谷は身体の有限性の自覚から、周囲のものとのつながり方を模索する様子を記述していたが、有限な力(エネルギー)のやりくりを必要とするオフグリッドにおいても、自身の生活を可能にするために試行錯誤する過程で生の技術は身につけていく。我々が土地も方法もバラバラなオフグリッド実践に対して共通に見出すことができるのは、個人がモノや環境とのつながりがない状態から何度も挑戦を繰り返すことによって、その都度環境をオリジナルに立ち上げる、その運動である。

そのような力の流れに人々はタスクを通して関わる。ヴァニーニらが《オフグリッドの生》でタスクを連なりによって描くのは(タスク・シーケンス)、仕事をし、野菜を育て、収穫し、保存し、料理をして、皿を洗い、排泄し、土を作って、洗濯し、また作物を育

てるといふ一連の日常的な労働にこそオフグリッドの内実があり、それらは切り離してあることはないからだろう。オフグリッドの生活者自身が経験している日々の取り組みはこのように常にタスクの連続にあり、ただエネルギーの供給の仕方を切り替えるだけの単純な経験ではない。ケベック州で農園を営むジルズは、タスク・シークエンスの中で排泄物が微生物によって分解され土に還る様子を「すばらしい賜物だよ」と賛美するが、我々がその自己充足の様子から目の当たりにするのは、自らのコントロールの範囲を超え、しかし確実に自らの参与によって起こる有機的な変化である。ヴァニーニらは、多数な事例を組み合わせることで、オフグリッド実践者たちがどのようなモノに囲まれ、どのようなタスクに従事しているのかということをもイメージ的にも理解させ、「流れ」のある家庭生活を浮き彫りにさせてきた。

一方、非電化工房での微視的な観察からは、環境や行為者の身体感覚という問題が、その接点である技術にあらわれている様子が分かる。藤村氏がこれまでノコギリも握ったことがない弟子に対して技術の指導を行う際には、とにかく「感覚」をつかむことが強調されてきたことから考えてみたい。

「ポータブル・バイトイレ」づくりでIさんは、藤村氏に「感覚の統合」を指導された後も失敗を繰り返した。感覚の統合が一筋縄ではいかないのは、求めている感覚が「結果的なもの」であったことも要因のひとつだろう。それは「達成」の感覚であり、達成のない時点から意識することは難しい。教育学を専門とする生田久美子は「Taskの学びは、いかにしたらある種の行為ができるかという『方法(やり方)の学び』」であるのに対して、「Achievementの学びはある種の行為が生起してしまう『状態の学び』」であると方法と状態の学習を区別している[生田 2011:12]。工房における「2つの時間イメージを統合する」という指示に対しては、方法を意識しながら、一方で「統合された」という達成状態を模索する必要があった。Iさんは繰り返し練習を重ねることでそうした達成状態の感覚を得ることに集中していた²⁵。そこで観察されるのは、行為を反復する中で、わずかではあるものの自己の身体のポジションを変容させ、徐々にミリ単位の正確さへと近づく「生の技術」生成のプロセスであった。

今まさに作りつつあるというプロセスが、単にモノを完成させるという目的のために回収されることなく、学び、関係を生む時間として生きられ、手の内に技術として残る。こうした技術指導の際の「感覚」の強調は、藤村氏が未来に不安を感じて「絶望」を口にする現代の若者たちへ生の技術を提供するということにも関わると思われる²⁶。非電化工房での弟子入り期間は1年間と決められており、後に別の場所に住まうことが前提とされている。弟子入りで考慮さ

25 完成したモノを起点にするならば、機械のセッティングの間違いや力の入れ具合によって切断する位置がずれて没になった数々のパーツは、失敗の累積品である。しかし、作業者とともにひとつひとつの行為を経験していくことで筆者が目にしたのは、先ほどよりも正確さへと近づいていく不可逆的時間の歩みである。

26 藤村氏は出会う若者の多くが「絶望」を口にするということについて語った。「多くの若い人が絶望感を口にするんですね。本当には絶望していないくせに、本当の絶望するのはもっと悲惨なのに。色々な努力をしたけどすべてが打ち砕かれて、そしてもうやることがないって言って絶望するのが本当の絶望。今の若い人が口にする絶望感あまりにも軽い。何もやらないで絶望している。やる前から絶望しているっていう。そういう風潮があるね。とても、軽いね。」(8月4日工房サンテラスにて)

27 Mさんは、最後の取材で弟子入りをして一年を振り返り、「ノコギリは力を入れなくて引くだけ、切られている音を聞きながら…先生のアドバイスを思い出します[…] 道具たちとなじむ機会を得たおかげで、今まで自分にはできないと思っていたことがやってみたらできたという経験をさせてもらい、自分の幅が広がった気がします」と述べていた。

れるべきは、これから自分の住む場所をある程度自分で選んでいける状況において、次の切断と接続の機にあって一から途方にくれることなくつくる能力を育てることである。エドワード・リードは、環境内の情報を知覚し・行為する方法を学習する直接的な経験の機会が減少した現代社会においては、希望の力が奪われ、結果、多くの人々が自己の利益という最も狭い領域でしかものを見られなくなっていると主張している[リード 2010]。リードによれば希望とは、目的があり、それを達成するために自分にできることを具体的に知っている状態である[2010:208-210]。工房の場合、若者の「絶望」という言葉は目的達成の方法と自らのふるまいがいかにあるべきかを知らない状態を差しているように思われる。できないという思い込みは、具体的な行為のイメージが「ない」ということと深く関わっている。工房の弟子入りは、そうした行為のイメージを具体的に描く能力を育てることを目的にしていた。この場で行われている実践は、流動する世界に対して、自分のふるまいの可能性を増やすことである²⁷。

オフグリッドを自ら選択する人々が主体性や自立、自由という言葉を使用する時に念頭におかれているのは、働きかけることができない、納得のいかない外部の力からの切り離しである場合が多い。主体的に切断を選択することができる背景には、もちろんテクノロジーの発展があり、藤村氏はそれを可能にするシステムを発明する主体でもあった。しかし、テクノロジーの有無だけでそれが実現されるのではなく、「道具と関係を結び」、自身の身体の使い方自体を学ぶ必要がある。藤村氏が師として教示を試みていた具体的なふるまいのイメージは、弟子がフローの一部としての自分自身の位置を、実験と試行錯誤を通して時間をかけ、獲得していくための羅針盤であったと言える。

結論

本稿ではオフグリッド実践に関する民族誌の事例考察、また実際の参与観察による民族誌的描写から、家庭生活の維持のためにいかに周囲のモノや人々との関係を編み、ほどこき、そして編み直していくのか、そのプロセスを明らかにしてきた。これまでの研究の枠組みでは、オフグリッドは切断や欠如の側面が強調される。しかし、より広い視野でエネルギーの人類学を構想していくならば、外在化されてきたエネルギーを再内在化して考えることが可能になる。

事例を整理すると、オフグリッドの実践には家庭生活における流れとやりくりの諸相が確認できる。それは「スイッチ」が分断して

いた家庭生活を再編させる契機であり、自給のために（生産だけではなく都度の修理も含め）時間をかけてモノと関係を結ぶことで、付き合い方を「消費」から「関係」へと変えている。また、オフグリッド実践はどこか遠いものとして感じられてきた技術を再び自己に近いものとして内へと取り込んでいくプロセスであり「生の技術」を環境の中で生成させてきた。なぜ、藤村氏が一貫して「感覚」を強調していたのか。それは弟子たちに「周囲と交渉し、オリジナルな運動規範を立ち上げていく過程」[熊谷 2009:165]を自覚的に経験させるためであり、ある素材やモノ、生きものとの交差を通して、具体的なふるまいのイメージを提供するためであろう。

オフグリッドの実践をひもとくことは、パイプラインや具体的な建築物のイメージを伴って想像されてきたエネルギーに関する問題を、家庭や身体の内外を結ぶ「感覚」を手がかりとして、再内在化することであった。また、それは同時にこれまで電気が為してきたことへの気づきや発見を促す。「オフ」の経験を通して電気を再び感覚することが、結果的に人間にとっての電気というものが持つ価値、オングリッドの生活が可能にした社会基盤を浮かび上がらせている点も重要である。その意味で、オン／オフグリッドについての人類学は、広く人間とエネルギーに関するやりとりを可視化するひとつの視点にもなるはずだ。

[付記] 本稿は科学研究費補助金（特別研究員奨励費、課題番号：1034375）に基づく研究成果の一部である。

参考文献

- Anusas, Mike and Tim Ingold. 2015. The Charge against Electricity. *Cultural Anthropology* 30(4):540-554.
- ベニユス、ジャニン 2006（1997）『自然と生体に学ぶバイオミクラー』山本良一監訳、吉野美耶子訳、東京：オーム社。
- Boyer, Dominic. 2014. Energopower: An Introduction. *Anthropological Quarterly* 87(2):309-333.
- . 2015. Anthropology Electric. *Cultural Anthropology* 30(4):531-539.
- Forde, Elaine. 2017. The Ethics of Energy Provisioning: Living Off-grid in Rural Wales. *Energy Research & Social Science* 30:82-93.
- 藤村靖之、有村正一 2012『藤村靖之の非電化の夕べ』東京：株式会社 budori。
- 藤原辰史 2014「エネルギーと住まいの環境史」『「マニュアル」の社会

- 史—身体・環境・技術』服部伸(編)、pp. 113-136、京都：人文書院。
- 福永真弓 2010『多声性の環境倫理—サケが生まれ帰る流域の正統性のゆくえ』東京：ハーベスト社。
- ギブソン、ジェームズ 1985 (1979)『生態学的視覚論—ヒトの知覚世界を探る』古崎敬、古崎愛子、辻敬一郎、村瀬旻訳、東京：サイエンス社。
- Gudeman, Stephen. 2012. Vital Energy: The Current of Relations. *Social Analysis: The International Journal of Social and Cultural Practice* 56(1):57-73.
- Gupta, Akhil. 2015. An Anthropology of Electricity from the Global South. *Cultural Anthropology* 30(4):555-568.
- 生田久美子 2011「『わざ』の伝承は何を指すのか—Taskか Achievenemtか」『わざ言語—感覚の共有を通しての「学び」へ』生田久美子、北村勝朗(編)、pp.3-31、東京：慶応義塾大学出版会。
- インゴルド、ティム 2017 (2007)「大地、空、風、そして天候」古川不可知訳、『現代思想』45(4):170-191。
- 木村周平 2018「序 特集 インフラを見る、インフラとして見る」『文化人類学』83(3):377-384。
- 熊谷晋一郎 2009『リハビリの夜』東京：医学書院。
- Leshem, Dotan. 2016. Retrospectives: What Did the Ancient Greeks Mean by Oikonomia? *Journal of Economic Perspectives* 30(1):225-231.
- Michell, Timothy. 2011. *Carbon Democracy: Political Power in the Age of Oil*. London: Verso.
- Özden-schilling, Canay. 2015. Economy Electric. *Cultural Anthropology* 30(4):578-588.
- リード、エドワード 2010 (1996)『経験のための戦い——情報の生態学から社会哲学へ』菅野盾樹訳、東京：新曜社。
- Smith, Jessica and Mette M. High. 2017. Exploring the anthropology of energy: Ethnography, energy and ethics. *Energy Research & Social Science* 30:1-6.
- Star, Susan. Leigh and Karen Ruhleder. 1996. Steps toward an Ecology of Infrastructure: Design and Access for Large Information Spaces. *Information Systems Research* 7(1):111-134.
- Vannini, Phillip and Jonathan Taggart. 2015. *Off the Grid: Re-assembling Domestic Life*. New York: Routledge.
- Veteto, James R. and Joshua Lockyer. 2008. Environmental Anthropology Engaging Permaculture: Moving Theory and Practice Toward Sustainability. *Culture and Agriculture* 31(1-2):47-58.

- Von Schnitzler, Antina. 2013. Traveling Technologies: Infrastructure, Ethical Regimes, and the Materiality of Politics in South Africa. *Cultural Anthropology* 28(4):670-693.
- Wallenborn, Gregorie and Harold Wilhite. 2014. Rethinking Embodied Knowledge and Household Consumption. *Energy Research & Social Science* 1:56-64.
- White, Leslie. 1943. Energy and the Evolution of Culture. *American Anthropologist* 45(3):335-356.
- Winther, Tanja and Harold Wilhite. 2015. Tentacles of Modernity: Why Electricity Needs Anthropology. *Cultural Anthropology* 30(4):569-577.
- Wilhite, Harold. 2008. *Consumption and the Transformation of Everyday Life: A View from South India*. London: Palgrave Macmillan.
- Winther, Tanja. 2008. *The Impact of Electricity: Development, Desires and Dilemmas*. Oxford: Berghahn Books.
- 箭内匡 2018『イメージの人類学』東京：せりか書房。

参照映像作品 (制作年、題、時間、制作国)

- Vannini, Phillip and Jonathan Taggart. 2016. 《オフグリッドの生—切断をめぐって》(*Life Off Grid: A Film about Disconnecting*)86分、カナダ。

参照ウェブサイト

- 非電化工房「非電化コーヒー焙煎器『煎り上手』」(2017/11/1 閲覧)
<http://www.hidenka.net/hidenkaseihin/roaster/irikata.htm>

- 「オフグリッドの生」(Life off Grid)(2020/8/18 閲覧)
<http://lifeoffgrid.ca/off-grid-living-the-book/building/>